

氏 名 江角 周子
学位の種類 博士（教育学）
学位記番号 博甲第 8653 号
学位授与年月 平成 30年 3月 23日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
審査研究科 人間総合科学研究科
学位論文題目 中学校におけるピア・サポート実践に関する研究
一人の話を聴くということを中心に—

主 査 筑波大学教授 博士（心理学） 庄司一子
副 査 筑波大学准教授 博士（文学） 岡本智周
副 査 筑波大学講師 博士（学術） 望月 聡
副 査 筑波大学准教授 博士（心理学） 飯田順子

論文の内容の要旨

江角 周子氏の博士学位論文は、中学校におけるピア・サポート実践の効果について、特に「人の話を聴く」ということに焦点を当てて検討したものである。要旨は以下のとおりである。

本論文は第Ⅰ部～第Ⅲ部までの3部構成となっている。

第Ⅰ部は第1章～第3章で構成され、児童生徒を取り巻く学校不適應の問題への予防教育が展開される中、特に中学生同士の関係性に焦点を当てたピア・サポート実践に関する先行研究と、ピア・サポート実践と「人の話を聴く」ことに関する先行研究の検討が行われ、本研究の目的が述べられた。

第1章では、児童生徒の学校不適應の問題、特に中学生への予防教育の実施において仲間関係に焦点を当てる必要が指摘され、ピア・サポート実践の現状と課題が分析された。第2章は聴くことの先行研究が検討され、対人援助・日常場面・学校における教育場面や授業場面における聴くことの重要性と実証研究が少ないことが指摘された。第3章では以上の検討を踏まえ、聴くことの学びがピア・サポート実践に与える効果を明らかにすることを目的とし、5つの研究課題が示された。5つの研究課題とは、研究課題①：中学生の捉える聴くことおよび聴いてもらうことの意味を測定する尺度を作成し、聴くことに関する認知面と行動面の関連を検証すること、研究課題②：聴くことについて繰り返し学ぶプログラムを実施し、プログラムを通じた行動変容プロセスについて認知面の変化に焦点を当て検討すること、研究課題③：聴くことについて繰り返し学ぶプログラムを含むピア・サポート実践を実施し、サポーターに対する効果を検討する。研究課題④：ピア・サポート実践のサポーター以外の生徒への効果を検討する。研究課題⑤：本研究におけるピア・サポート実践事例の聴くこと以外の要素が中学生に与えた効果について検証する、であった。

第Ⅱ部は第4章～第6章で構成され、研究課題①～⑤の調査および実践が検討されている。

第4章では、研究課題①について中学生を対象に調査研究が行われ、「聴くことの意味」および「聴

いてもらうことの意味」尺度作成が行われ、信頼性・妥当性が確認された。さらに聴くことへの意味づけ、聴く行動、サポート行動との関連が実証された。第5章では研究課題②が検討され、聴くこと中心のピア・サポートトレーニングの効果、行動変容のプロセスの質的検討が行われた。その結果ピア・サポートトレーニングは対象生徒のサポート行動・聴く行動を促進すること、トレーニングにおける聴く体験、聴いてもらう体験、観察体験のいずれもが生徒の認知を変化させ、行動変容をもたらすこと、それはさらに認知的変化、行動変容の維持、他者との積極的な関わりを促進させることが示された。第6章では研究課題②～⑤が検討された。研究課題③について、サポーターと他の生徒、サポーター間の比較が行われ、トレーニング前後のサポーターの変化、生徒の気づきについて検討が行われた。その結果、中学校でのピア・サポート実践はサポーター生徒の聴く行動とサポート行動を促進し、特に実践前にサポート行動を行っていなかった生徒のサポート行動を促進する効果が示された。またサポート概念の学習はサポートへの動機づけを高めることが示された。研究課題②の聴くことの学びを通じた行動変容プロセスを縦断的・量的調査により検討した。その結果(1)認知を媒介した聴く行動の変容プロセス、(2)聴く行動の変容による他者への積極的な関わりの増加、について構造方程式モデリングにより支持する結果が得られたが、効果の持続が難しい結果も示され、聴くことの反復的学習の必要性が示された。次に研究課題④についてサポーター以外の生徒のピア・サポートスペースの認知・利用度、介入前におけるサポート互恵性について検討を行った。その結果ピア・サポート実践の効果は、PS利用者の中でも特に実践開始前にサポート授受が互恵的でなく過小あるいは過剰利得状態であった者において学校への居心地の良さやサポート授受を高める効果があることが示された。最後に研究課題⑤について1年の実践期間中の時間経過とPS利用との関連、ピア・サポートスペース利用パターンから見るサポート活動の効果が検討された。その結果、実践開始前期は実践活動の認知や教室から近いことがスペースに近づくことと関連し、後期には実践内容の具体的理解がスペースへ行くことと関連することが示された。日常的な関わりの共行動的サポートは中学生のサポートの授受、学校適応感を高めることが示唆された。

第Ⅲ部は第7章で構成され、本研究の成果を踏まえ、総合的考察がなされた。

第7章では本研究の概要と研究成果が述べられ、今後、聴く行動に焦点を当てたピア・サポートトレーニングにおいては対象者の行動だけでなく認知面にも着目すること、介入効果を高めるには繰り返しの学習が必要であること、さらにサポートトレーニングの前にサポート概念の学習を行うことがサポートへの動機づけを高めること、が指摘された。最後に研究課題①～⑤に関する限界と課題について整理され、今後の展望が述べられた。

審査の結果の要旨

(批評)

現在の学校教育ではピア・サポート実践は多く行われ、また近年は「聴く」ことの意味や効果について教育的にも社会的にも高い関心が寄せられている。さらに近年は授業実践においても「聴く」ことの意味や効果の検討も行われるようになってきている。しかし、ピア・サポートや「聴く」ことの実証的研究は、これまでほとんど行われていない。

本研究は、教育現場におけるピア・サポート実践と「聴くこと」に関する教育的意義を認め、学校教育現場におけるピア・サポートの実際とその問題を具体的に示した。この問題を踏まえ、学校教育現場に何度も足を運び、聴くことに焦点をあてたピア・サポートトレーニングを実践し、その効果について、直接介入した生徒のみならず、学級、学校全体への波及効果をも量的・質的に詳細に検討し、実証している。また、介入した生徒へのインタビューを通し「聴くことの学習」が行動変容にもたらす効果について変容プロセスモデルを示し、さらに、介入生徒とその他の生徒の比較検討によってピア・サポートのとらえ方やサポートスペースへの関わりが変わることが具体的に示されている。

以上より、本研究は、ピア・サポートの実践と「聴く」ことのサポート効果を実証的に明らかにし、さらに今後のピア・サポートトレーニング、学校全体でのピア・サポートや予防教育の効果的取り組み、その実践と展開について、実証に基づき具体的に示した点において従来の研究をさらに

進め、示唆を与える研究として高く評価される。

平成 30 年 1 月 15 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。